

2018年度 日本インターンシップ学会東日本支部 第2回研究会報告

報告者 松坂暢浩（東日本支部副支部長）

12月1日（土）、青森中央短期大学（主催校 青森中央短期大学）を会場として、宮田篤会員のご協力の下に研究会を開催いたしました。東京以外の開催は、山形県、新潟県、岩手県に続き4回目になります。

開催にあたり、古閑博美支部長と主催校の久保薫学長からご挨拶をいただき、その後、研究発表、基調講演およびバズ・セッションの流れで行われました。

まず、3件の研究発表がありました。

- 1) 野村尚克会員（株式会社 MOVER & COMPANY）学年別インターンシップ体験のモデル化へ向けた検討 -1・2年次で体験した大学生へのデプスインタビュー調査から-
- 2) 山口圭介会員・川崎登志喜会員（玉川大学）「教育分野における就業体験の現状と体系化の試み -山口県教育委員会と青森県教育委員会の取組を手がかりとして-
- 3) 篠崎雅春会員（東京未来大学）「キャリア教育におけるキャリア・マーケティングの視点 ~プロバスケット球団創立インターンの事例から」

いずれの発表も、現場での実践や実地調査を基にした示唆に富む内容で、質疑応答も活発行われました。

次に「地方都市における共育型インターンシップの可能性」をテーマに、青森 COC+推進機構で共育インターンシップに取り組む曾我亨氏（弘前大学副理事・人文社会科学部教授）と小寺将太氏（一般社団法人 tsumugu 代表理事、弘前大学非常勤講師）の基調講演およびインターンシップ参加学生を交えたバズ・セッションが行われました。

基調講演では、オール青森による「地域創成人材」育成および県内定着の取組みの目玉の1つである「共育型インターンシップ」の具体的な取組事例をご紹介いただきました。補助金事業終了後、持続的システムとして機能させていくためには、情熱的なコーディネーターの存在とハブになる団体の協力が必要不可欠である点。また、学生時代にインターンシップに参加し、現在地域で活躍している OBOG に協力してもらうことが継続していく上で鍵になるとの指摘がありました。

基調講演後のバズ・セッションでは、各グループに基調講演の講師およびインターンシップ参加学生が加わり、活発な意見交換が行われました。特に各グループのまとめを共有し合うなかで「仕事は引き継げるが、想いは引き継げない」という発言は大変印象に残りました。インターンシップの属人化・組織化の問題を考える際、それぞれのメリットとデメリットを見究め調整していくコーディネーターが求められており、彼らと一緒に地域の大学や企業等が連携して取組んでいくことが重要であると改めて感じました。

最後に研究会の総括を岩手県立大学の高瀬和実会員が行い、無事研究会を終えることができました。

